

芥川龍之介作

杜子春

朗読 石原みほ子

第三卷 1. 芥川龍之介「杜子春」



芥川龍之介（あくたがわ りゅうのすけ）

1892年（明治25）－1927年（昭和二）。東京生まれ。東大在学中に、同級生の久米正雄らと第3次、4次「新思潮」を発刊。1918年（大正7）に発表された「鼻」が夏目漱石に激賞され、それに続く「芋粥」「羅生門」によって新進作家の地位を確立する。「今昔物語集」などの古典から題材を取り、それに近代的な解釈をほどこした歴史小説が多い。鈴木三重吉のすすめで書いた「蜘蛛の糸」が児童文学の始めだが、本シリーズで取り上げた1920年（大正9）発表の「杜子春」、「魔術」も有名。

「杜子春」は中国の古典「杜子春伝」からの「再話」であるが、概要はこうだ。「一文無しになって途方に暮れていた杜子春を大金持ちにしてくれた老人は仙人だった。杜子春はもう贅沢に飽きて仙人になろうと弟子入りしたが、その修行は凄まじく地獄で馬と成り果てた両親に会う」

「用語解説」

蘭陵（らんりょう）

中国江蘇省常州市の地名。美酒を産出することで有名

竜眼肉（りゅうがんにく）

リュウガンの種子。肉質、甘味の仮種皮で被われる。生食し

あるいは乾し果物として食用または生薬とする

蛾眉山（がびさん）

中国四川省の中部にある山で、主峰は3099メートル、天台山、

五台山と共に中国仏教の三大霊場の一つで、奇勝に富む。

西王母（せいおうぼ）

中国に古く信仰された女の仙人。

闇穴道（あんけつどう）

7日7夜日月の光を見ず、重罪人を通らせるといふ暗黒の道

或春の日暮です。

唐の都洛陽らくやうの西の門の下に、ぼんやり空を仰いでゐる、一人の若者がありました。

若者は名は杜子春とししゆんといつて、元は金持の息子でしたが、今は財産を費つかひ尽つくして、その

日の暮しにも困る位、憐あはれな身分になつてゐるのです。

何しろその頃洛陽といへば、天下に並ぶものがない、繁昌を極めた都ですから、往來わうらいに

はまだしつきりなく、人や車が通つてゐました。門一ぱいに当つてゐる、油のやうな夕日の

光の中に、老人のかぶつた紗しやの帽子や、土耳其トルコの女の金の耳環や、白馬に飾つた色糸たづなの手綱

が、絶えず流れて行く容子ようすは、まるで画のやうな美しきです。

しかし杜子春は相変らず、門の壁に身を凭もたせて、ぼんやり空ばかり眺めてゐました。空

には、もう細い月が、うらうらと靡なびいた霞の中に、まるで爪の痕あとかと思ふ程、かすかに白

く浮んでゐるのです。

「日は暮れるし、腹は減るし、その上もうどこへ行つても、泊めてくれる所はなささうだし——こんな思ひをして生きてゐる位なら、一そ川へでも身を投げて、死んでしまつた方がましかも知れない。」

杜子春はひとりさつきから、こんな取りとめもないことを思ひめぐらしてゐたのです。

するとどこからやつて来たか、突然彼の前へ足を止めた、片目すがめの老人があります。そ

れが夕日の光を浴びて、大きな影を門へ落すと、ぢつと杜子春の顔を見ながら、

「お前は何を考へてゐるのだ。」と、横柄わうへいに言葉をかけました。

「私ですか。私は今夜寝る所もないので、どうしたものかと考へてゐるのです。」

老人の尋ね方が急でしたから、杜子春はさすがに眼を伏せて、思はず正直な答をしました。

「さうか。それは可哀さうだな。」

老人は暫しばらく何事か考へてゐるやうでしたが、やがて、往来にさしてゐる夕日の光を指さ

しながら、

「ではおれが好いことを一つ教へてやろう。今この夕日の中に立つて、お前の影が地に映つたら、その頭に当る所を夜中に掘つて見るが好い。きつと車に一ぱいの黄金が埋まつてゐる筈だから。」

「ほんたうですか。」

杜子春は驚いて、伏せてゐた眼を挙げました。所が更に不思議なことには、あの老人はどこへ行つたか、もうあたりにはそれらしい、影も形も見当りません。その代り空の月の色は前よりもなほ猶白くなつて、休まない往来の人通りの上には、もう気の早いかうもり蝙蝠が二三匹ひらひら舞つてゐました。

とししゆん  
杜子春は一日の内に、洛陽の都でも唯一人といふ大金持になりました。あの老人の言葉

通り、夕日に影を映して見て、その頭に当る所を、夜中にそつと掘つて見たら、大きな車にも余る位、黄金が一山出て来たのです。

大金持になつた杜子春は、すぐに立派な家を買つて、げんそう 玄宗皇帝にも負けない位、ぜいたく 贅沢な暮しをし始めました。らんりよう 蘭陵の酒を買はせるやら、りゆうがんにく 桂州の竜眼肉をとりよせるや

ら、日に四度色の変る牡丹を庭に植ゑさせるやら、しろくじやく 白孔雀を何羽も放し飼ひにするやら、

玉を集めるやら、錦を縫はせるやら、かうぼく 香木の車を造らせるやら、象牙の椅子をあつら 誂へる

やら、その贅沢を一々書いてゐては、いつになつてもこの話がおしまひにならない位です。

するとかういふうはさ 噂を聞いて、今までは路で行き合つても、挨拶さへしなかつた友だちな

どが、朝夕遊びにやつて来ました。それも一日毎に数が増して、半年ばかり経つ内には、洛陽の都に名を知られた才子や美人が多い中で、杜子春の家へ来ないものは、一人もない位になつてしまつたのです。杜子春はこの御客たちを相手に、毎日酒盛りを開きました。その酒

盛りの又盛なことは、中々口には尽されません。

しかしいくら大金持でも、御金には際限がありますから、さすがに贅ぜいたくや沢家の杜子春も、一年二年と経つ内には、だんだん貧乏になり出しました。さうすると人間は薄情なもので、昨日までは毎日来た友だちも、今日は門の前を通つてさへ、挨拶一つして行きません。ましてとうとう三年目の春、又杜子春が以前の通り、一文無しになつて見ると、広い洛陽の都の中にも、彼に宿を貸さうといふ家は、一軒もなくなつてしまひました。いや、宿を貸す所か、今では腕に一杯の水も、恵んでくれるものはないのです。

そこで彼は或日の夕方、もう一度あの洛陽の西の門の下へ行つて、ぼんやり空を眺めながら、途方に暮れて立つてゐました。するとやはり昔のやうに、片目すがめ眇の老人が、どこからか姿を現して、



「お前は何を考へてゐるのだ。」と、声をかけるではありませんか。

「私は今夜寝る所もないので、どうしたものかと考へてゐるのです。」と、恐る恐る返事をしました。

「さうか。それは可哀さうだな、ではおれが好いことを一つ教へてやらう。今この夕日の中へ立つて、お前の影が地に映つたら、その胸に当る所を、夜中に掘つて見るが好い。きつと車に一ぱいの黄金が埋まつてゐる筈だから。」

老人はかう言つたと思ふと、今度も亦人またごみの中へ、掻き消すやうに隠れてしまひました。

杜子春はその翌日から、たちま忽ち天下第一の大金持に返りました。と同時に相変わらず、しはうだい仕放題な贅沢をし始めました。ですから車に一ぱいあつた、あのおびただ夥しい黄金も、又三

年ばかり経つ内には、すつかりなくなつてしまひました。

「お前は何を考へてゐるのだ。」

片目眇の老人は、三度杜子春の前へ来て、同じことを問ひかけました。

「私ですか。私は今夜寝る所もないので、どうしようかと思つてゐるのです。」

「さうか。それは可哀さうだな。ではおれが好いことを教へてやらう。今この夕日の中へ立つて、お前の影が地に映つたら、その腹に当る所を、夜中に掘つて見るが好い。きつと車に一ぱいの——」

老人がここまで言ひかけると、杜子春は急に手を挙げて、その言葉を遮さへぎりました。

「いや、お金はもう入らないのです。」

「金はもう入らない？ ははあ、では贅沢するにはとうとう飽きてしまつたと見えるな。」

老人はいぶか審しきょうな眼つきをしながら、ちつと杜子春の顔を見つめました。

「何、贅沢に飽きたのぢやありません。人間といふものに愛想がつきたのです。」

杜子春は不平さうな顔をしながら、つつけんどん突慳貪にかう言ひました。

「それは面白いな。どうして又人間に愛想が尽きたのだ？」

「人間は皆薄情です。私が大金持になつた時には、世辞も追つゐしやう従もしますけれど、一旦貧

乏になつて御覧なさい。やさ柔しい顔さへもして見せはしません。そんなことを考へると、た

とひもう一度大金持になつた所が、何にもならないやうな気がするのです。ですから私はあ

なたの弟子になつて、仙術の修業をしたいと思ふのです。いいえ、隠してはいけません。あ

なたは道德の高い仙人でせう。仙人でなければ、一夜の内に私を天下第一の大金持にするこ

とは出来ない筈です。どうか私の先生になつて、不思議な仙術を教へて下さい。」

老人は眉をひそめた儘、暫くは黙つて、何事か考へてゐるやうでしたが、やがて又につこ

り笑ひながら、

「いかにもおれは峨眉山がびさんに棲すんでゐる、鉄冠子てつくわんしといふ仙人だ。始めお前の顔を見た時、

どこか物わかりが好ささうだつたから、二度まで大金持にしてやつたのだが、それ程仙人になりたければ、おれの弟子にとり立ててやらう。」と、快く願いを容れてくれました。

「いくらおれの弟子にした所で、立派な仙人になれるかなれないかは、お前次第できまることだからな。――が、兎も角もまづおれと一しよに、峨眉山の奥へ来て見るが好い。」

鉄冠子はそこにあつた青竹を一本拾ひ上げると、口の中に呪じゆもん文を唱へながら、杜子春と

一しよにその竹へ、馬にでも乗るやうに跨またがりました。すると不思議ではありませんか。竹

杖は忽たちまち竜のやうに、勢よく大空へ舞ひ上つて、晴れ渡つた春の夕空を峨眉山の方角へ飛

んで行きました。

二人を乗せた青竹は、間もなく峨眉山へ舞ひ下りました。

そこは深い谷に臨んだ、幅の広い一枚岩の上でしたが、よくよく高い所だと見えて、中空に垂れた北斗の星が、茶碗程の大きさに光つてみました。元より人跡の絶えた山ですから、あたりはしんと静まり返つて、やつと耳にはひるものは、後の絶壁に生えてゐる、曲りくねつた一株の松が、こうこうと夜風に鳴る音だけです。

鉄冠子は杜子春を絶壁の下に坐らせて、

せいわうぼ

「おれはこれから天上へ行つて、西王母に御眼にかかつて来るから、お前はその間ここに坐つて、おれの帰るのを待つてゐるが好い。多分おれがゐなくなると、いろいろな魔性ましやうが現れて、お前をたぶらかさうとするだらうが、たとひどんなことが起らうとも、決して声を出すのではないぞ。もし一言でも口を利いたら、お前は到底仙人にはなれないものだど覺悟をしろ。好いか。天地が裂けても、黙つてゐるのだぞ。」と言ひました。

杜子春はたつた一人、岩の上に坐つた儘、静に星を眺めてゐました。すると彼かれこれ是半時ばかり経つて、深山の夜気が肌寒く薄い着物に透とほり出した頃、突然空中に声があつて、

「そこにゐるのは何者だ。」と叱りつけるではありませんか。

しかし杜子春は仙人の教通り、何とも返事をしずにゐました。

「返事をしないと立ち所に、命はないものと覚悟しろ。」と、いかめしく嚇おどしつけるのです。

都、どこから登つて来たか、爛らんらん々と眼を光らせた虎が一匹、忽然こつぜんと岩の上に躍り上つ

て、杜子春の姿を睨みながら、一声高く哮たけりました。のみならずそれと同時に、頭の上の

松の枝が、烈しくざわざわ揺れたと思ふと、後の絶壁の頂からは、四斗樽程の白蛇はくだが一匹、

炎のやうな舌を吐いて、見る見る近くへ下りて来るのです。

杜子春はしかし平然と、眉毛も動かさずに坐つてゐました。

虎と蛇とは、一つ餌食を狙つて、互に隙うかがでも窺うかがふのか、暫くは睨合ひの体でしたが、や

がてどちらが先ともなく、一時に杜子春に飛びかかりました。が、虎の牙に噛まれるか、蛇の舌に吞まれるか、杜子春の命は瞬またたく内に、なくなつてしまふと思つた時、虎と蛇とは霧の如く、夜風と共に消え失せて、後には唯、絶壁の松が、さつきの通りこうこうと枝を鳴らしてゐるばかりなのです。杜子春はほつと一息しながら、今度はどんなことが起るか、心待ちに待つてゐました。

すると一陣の風が吹き起つて、墨のやうな黒雲が一面にあたりをとぎすや否や、うす紫の稲妻がやにはに闇を二つに裂いて、凄らいじく雷らいが鳴り出しました。いや、雷ばかりではありません。それと一しよに瀑たきのやうな雨も、いきなりどうどうと降り出したのです。杜子春はこの天変の中に、恐れ気もなく坐つてゐました。風の音、雨のしぶき、それから絶え間ない稲妻の光、――暫くはさすがの峨眉山がびさんも、覆くつがへるかと思ふ位でしたが、その内に耳をもつんざく程、大きな雷鳴とどろが轟とどろいたと思ふと、空に渦巻いた黒雲の中から、まつ赤な一本の

火柱が、杜子春の頭へ落ちかかりました。

杜子春は思はず耳を抑へて、一枚岩の上へひれ伏しました。が、すぐに眼を開いて見ると、空は以前の通り晴れ渡つて、向うに聳そびえた山山の上にも、茶碗程の北斗の星が、やはりきらきら輝いてゐます。が、今度は彼の坐つてゐる前へ、金の鎧よろひを着下きくだした、身の丈三丈もあらうといふ、厳かな神将が現れました。神将は手に三みつ又またの戟ほこを持つてゐましたが、いきなりその戟の切先を杜子春の胸もとへ向けながら、眼を嗔いからせて叱りつけるのを聞けば、

「こら、その方は一体何物だ。この峨眉かいびやく山といふ山は、天地開闢すまひの昔から、おれが住居すまひをしてゐる所だぞ。それも憚はばからずたつた一人、ここへ足を踏み入れるとは、よもや唯の人間ではあるまい。さあ命が惜しかつたら、一刻も早く返答しろ。」と言ふのです。

しかし杜子春は老人の言葉通り、黙然もくねんと口を噤つぶんでゐました。



神将は戟ほこを高く挙げて、向うの山の空を招きました。その途端に闇がさつと裂けると、驚いたことには無数の神兵が、雲の如く空に充満みちみちて、それが皆槍や刀をきらめかせながら、今にもここへ一なだれに攻め寄せようとしてゐるのです。

「この剛情者め。どうしても返事をしなければ、約束通り命はとつてやるぞ。」

神将はかう喚わめくが早いか、三叉みつまたの戟ほこを閃ひらめかせて、一突きに杜子春を突き殺しました。

杜子春の体は岩の上へ、仰向けに倒れてゐましたが、静に体から抜け出して、地獄の底へ下りて行きました。

この世と地獄との間には、闇穴あんけつ道だうといふ道があつて、そこは年中暗い空に、氷のやうな冷たい風がぴゅうぴゅう吹き荒すさんでゐるのです。杜子春はその風に吹かれながら、暫く

は唯<sup>ただ</sup>木の葉のやうに、空を漂つて行きましたが、やがて森羅殿<sup>しんらでん</sup>といふ額の懸つた立派な御殿の前へ出ました。

御殿の前にゐた大勢の鬼は、杜子春の姿を見るや否や、すぐにそのまはりを取り捲いて、階<sup>きざはし</sup>の前へ引き据ゑました。階の上には一人の王様が、まつ黒な袍<sup>きもの</sup>に金の冠<sup>かんむり</sup>をかぶつて、いかめしくあたりを睨んでゐます。これは兼ねて噂<sup>うはさ</sup>に聞いた、閻魔大王<sup>えんま</sup>に違ひありません。杜子春はどうなることかと思ひながら、恐る恐るそこへ跪<sup>ひざまづ</sup>いてゐました。

「こら、その方は何の為に、峨眉山の上へ坐つてゐた？」

閻魔大王の声は雷のやうに、階の上から響きました。杜子春は早速その間に答へようとしてましたが、ふと又思ひ出したのは、「決して口を利くな。」といふ鉄冠子の戒めの言葉です。

そこで唯頭を垂れた儘、唾<sup>おし</sup>のやうに黙つてゐました。すると閻魔大王は、持つてゐた鉄の笏<sup>しやく</sup>を挙げて、顔中の鬚<sup>ひげ</sup>を逆立てながら、

「その方はここをどこだと思ふ？　速すみやかに返答をすれば好し、さもなければ時を移さず、

地獄の呵責かしやくあに遇はせてくれるぞ。」と、威丈高あたいだけかに罵ののしりました。

が、杜子春は相変らず唇くちびる一つ動かしません。それを見た閻魔大王は、すぐに鬼どもの

方を向いて、荒々しく何か言ひつけると、鬼どもは一度に畏かしこまつて、忽ち杜子春を引き立

てながら、森羅殿の空へ舞ひ上りました。

地獄には誰でも知つてゐる通り、劍つるぎの山や血の池の外にも、焦熱地獄せうねつといふ焰の谷

や極寒地獄ごくかんといふ氷の海が、真暗な空の下に並んでゐます。鬼どもはさういふ地獄の中へ、

代る代る杜子春を抛はふりこみました。ですから杜子春は無残にも、劍に胸を貫かれるやら、

焰に顔を焼かれるやら、舌を抜かれるやら、皮を剥がれるやら、鉄の杵きねに撞つかれるやら、

油の鍋に煮られるやら、毒蛇に脳味噌を吸はれるやら、熊鷹に眼を食はれるやら、——その苦しみを数へ立ててゐては、到底際限がない位、あらゆる責苦せめくに遇はされたのです。それでも杜子春は我慢強く、ぢつと齒を食ひしばつた儘、一言も口を利きませんでした。

閻魔大王は眉をひそめて、暫く思案に暮れてゐましたが、やがて何か思ひついたと見えて、

「この男の父ちちはは母は、畜生道に落ちてゐる筈だから、早速ここへ引き立てて来い。」と、一匹の鬼に云ひつけました。

鬼は忽ち風に乗つて、地獄の空へ舞ひ上りました。と思ふと、又星が流れるやうに、二匹の獣を駆り立てながら、さつと森羅殿の前へ下りて来ました。その獣を見た杜子春は、驚いたの驚かないのではありません。なぜかといへばそれは二匹とも、形は見すばらしい痩せ馬でしたが、顔は夢にも忘れない、死んだ父母の通りでしたから。

「こら、その方は何のために、峨眉山の上に坐つてゐたか、まつすぐに白状しなければ、今

度はその方の父母に痛い思ひをさせてやるぞ。」

杜子春はかう嚇おどされても、やはり返答をしずにもりました。

「この不孝者めが。その方は父母が苦しんでも、その方さへ都合が好ければ、好いと思つてゐるのだな。」

閻魔大王は森羅殿も崩れる程、凄じい声で喚きました。

「打て。鬼ども。その二匹の畜生を、肉も骨も打ち砕いてしまへ。」

鬼どもは一斉に「はつ」と答へながら、鉄の鞭むちをとつて立ち上ると、四方八方から二匹の馬を、未練みれんみしやく未釈みしやくなく打ちのめしました。

杜子春は必死になつて、鉄冠子の言葉を思ひ出しながら、緊かたく眼をつぶつてゐました。

するとその時彼の耳には、殆ほとんど声とはいへない位、かすかな声が伝はつて来ました。

「心配をおしでない。私たちはどうなつても、お前さへ仕合せになれるのなら、それより結

構なことはないのだからね。大王が何と仰おつしやつても、言ひたくないことは黙つて御出おいで。」

それは確に懐しい、母親の声に違ひありません。杜子春は思はず、眼をあきました。さうして馬の一匹が、力なく地上に倒れた儘、悲しさうに彼の顔へ、ぢつと眼をやつてゐるのを見ました。母親はこんな苦しみの中にも、息子の心を思ひやつて、鬼どもの鞭に打たれたことを、怨むけしき気色さへも見せないのです。大金持になれば御世辞を言ひ、貧乏人になれば口も利かない世間の人たちに比べると、何といふ有難い志でせう。何といふ健気な決心でせう。杜子春は老人の戒めも忘れて、まろ転ぶやうにその側へ走りよると、両手に半死の馬の頸を抱いて、はらはらと涙を落しながら、「お母さん。」と一声を叫びました。……

その声に気がついて見ると、杜子春はやはり夕日を浴びて、洛陽の西の門の下に、ぼんやり佇んでゐるのでした。霞んだ空、白い三日月、絶え間ない人や車の波、——すべてがまだ

峨眉山へ、行かない前と同じことです。

「どうだな。おれの弟子になつた所が、とても仙人にはなれはすまい。」

片目 <sup>すがめ</sup> 眇の老人は微笑を含みながら言ひました。

「なれません。なれませんが、しかし私はなれなかつたことも、反<sup>かへ</sup>つて嬉しい気がするのです。」

「いくら仙人になれた所が、私はあの地獄の森羅殿の前に、鞭を受けてゐる父母を見ては、黙つてゐる訳には行きません。」

「もしお前が黙つてゐたら、おれは即座にお前の命を絶つてしまはうと思つてゐたのだ。——お前はもう仙人になりたいといふ望も持つてゐまい。大金持になることは、元より愛想がつきた筈だ。ではお前はこれから後、何になつたら好いと思ふな。」

「何になつても、人間らしい、正直な暮しをするつもりです。」

杜子春の声には今までにない晴れ晴れした調子が罩こもつてゐました。

「その言葉を忘れるなよ。ではおれは今日限り、二度とお前には遇はないから。」

鉄冠子がかう言ふ内に、もう歩き出してゐましたが、急に又足を止めて、杜子春の方を振り返ると、

「おお、さいはひ幸、今思ひ出したが、おれは泰山の南の麓ふもとに一軒の家を持つてゐる。その家を畑ごとお前にやるから、早速行つて住まふが好い。今頃は丁度家のまはりに、桃の花が

一面に咲いてゐるだらう。」と、さも愉快さうにつけ加へました。